

随 筆 見えないものを見る —廃棄物めがねの使い方—

末 石 冨 太 郎*

私は中学生のころ、次のような他愛もないモデルを考えて、ひとりで悦にいていたことがある。「私達人間は、五感を通じて認識しているこの世の現象を、それが実際に起こってから一定の時間間隔だけ遅れて知覚している」という仮定である。光の速さは物理の法則にしたがっているのはもちろんだが、人間のもっている知覚装置だけが常に10秒なら10秒だけ正確に遅れると考えるのである。たとえば、手にもったごみをどこかに捨てようとする、そして空地にごみを捨てる、それを見る、最後にきたないなと感じたとする。これだけの行動と情景は、自分自身とごみと空地との相対関係として発生した、せいぜい1分間ぐらいの現象である。しかし絶対的空間の中では、70秒前から10秒前までに起こった現象である。

つまり、私たちが完全に実存的にとらえていた現世は、わずか10秒前ではあるけれども過去の幻であったということになる。

このモデルを否定するのは訳もないことである。電子装置のひとつもあれば、10秒ずつ遅らせる知覚装置は頭の中のどこにもないことがはっきりするはずだ。しかし、このモデルは否定されるためにあるのではなく、私たちが発想の転換をするためにあるのだと考えてみよう。

もし私たちが完全に遅れのない絶対的時空間にいるのならば、将来のことは何ひとつ起こっていないのだから、悲観的な未来を論じようと楽観論を展開しようとそれは全く自由である。しかしもし遅れがあるのならば、現在認識している相対的現象を、同時に進行しているはずの絶対事象と関連させて判断する必要性が生まれる。言い換えれば、絶対現在を楽観視するのと悲観視するのでは、相対現在から相対将来へ

至る認識の制御のしかたに大きな違いがあることがわかる。将来を洞察するためには尺度を変えてみなければならぬ。

このモデルは要するに、普通の方法では見えないものを見るための仮説であるから、人間の中に10秒遅れのシステムが存在しないのであれば、大脳の外のどこか未知のところを持出して考えればよい。この未知器官までの距離によって、遅れ時間は10秒でも1日でもまた10年でもかまわないのである。

★ ★ ★

世の中には同じことを考えている人がいるものである。食糧問題で有名な西丸震也氏の小説に、もうせんごけの精が西丸氏自身に作用してある湿原の情景描写をさせたというくだりがある。外界から人間にある想念が注入されたとしたら、その人はさも自分で考えついたと思うのではないかというのである。この伝でいくと、私たちの能力のよしあしはいわば受信装置の受信能力の出来不出来にかかっているわけで、大人になれば邪念が多くなって受信装置が駄目になるという。

西丸モデルと私のモデルを組合せると面白いことになる。過去に実際に経験しつつあったことでも、遅れ時間が突然変ると「度忘れ」になる。また、遅れシステムが何か異常な状態で短絡されてしまった時の状態が「虫のしらせ」に相当するのではないだろうか。

虫のしらせといえば、私は数年前にうかがった西堀栄三郎氏の南極での経験談を思い出す。雪上車の故障を虫のしらせで知って事故を未然に防いだことを特に力説されたのである。これを上述のモデルによって私なりに解釈すれば、南極という厳しい条件を利用して受信装置を高感度に行っていることと、あらゆる事故のパターンを客観化すること——いわば現在をいったん

* 末石冨太郎(Tomitaro SUEISHI),大阪大学工学部,環境工学科,教授,工博,水資源工学,環境経済学

相対化してみることによって、はじめて越冬隊長のリーダーシップの責任が果されているのではないかと気づくのである。

私たちは通常、現在を常に絶対現在と考え、これから全く自由に10～30年先の絶対未来に飛躍してそのあるべき姿を絶対化し、長期計画ができたと豪語する政治や行政に接することがあまりにも多い。そして、邪念に満ち満ちた受信装置をもって絶対未来の情報を確実にキャッチしていると信じることほど危険なシステムはないのである。

環境問題のいくつかを相対現在にいて感知したのだと考えればこそ、まず第一に、真の意味での長期的な視点で、容易には目に見えない——精密な計器でなければ測れないということではない——環境変化をとらえる作業に着手しなければならない。環境全体を潜在廃棄物の集積とみなし、それら物質が機能論的に廃棄物化する過程で、環境全体が蘇生不能な廃棄物の大集合となる絶対未来が存在するとみる考え方が「廃棄物めがね」のかけ方である。

私は約10年前に大阪国際空港の上から地上を眺めたとき、偶然このめがねを獲得したことにしてきたが、実を言うと、約30年遅れの知覚装置を飛行機の中に意図的に持ち込んで地上を見、そのときの印象——「大阪はみなごみだ！」——に基づいて大阪の都市活動を解析した結果、ごく初歩的ではあるが、都市環境破局を回避する青写真が描けたのである（拙著、都市環境の蘇生、中公新書、昭和50年8月）。

★ ★ ★

研究というものは、誰も必要性を感じないうちから手をつけておかないと、本当に必要なときに役に立たないものである。社会的に必要性がわかっている——多分半数以上の人々が合意して——行う研究は、かえって全体を悪くするのに加担するのではないか。なぜならば、現代のように縦割り・分業化の進んだ社会では、総合対策を実施することは所詮無理であって、問題に追従して打たれる対策は、必ず別分野の問題の犠牲のうえに成立つからである。

最近ようやく水資源不足に関する議論が活発になってきた。「大都市を中心とする地域で

は、水があらゆる社会経済発展の制約要因とならざるを得なくなった」とされ、節水型社会への移行が取沙汰されている。しかしその一方では、なお水需要の増加が見込まれており、水資源の新規開発も必要とされ、いまだに明解な指導原理が定立されたとは言い得ない。廃棄物めがねをかければそれがよくわかるのである。

生産や人口の増加に常に追従しながら、単純に肥大してきた水資源需給システムを、めがねを通して眺めてみると、なるほど、時間の焦点は少しぼやけているものの、数年ないし何十年か先に水システムが否応なく握らねばならぬ都市社会の方向決定の casting vote がよく見えるのである。しかしその図は陰惨である。ひとつの図では、水分野集団がゲバ棒を握っているようで、需要制御の強行手段に出ている。もう1枚では、みすみす背負い切れぬ責任を有頂天になって背負ったものの、都市制御の能力不足を斜弾されて遂に腹かき切っている。

このうちどちらにころんだとしても、一様に困るのは都市全体であって、そのためにこそ研究が必要なのだが、真の水資源計画は、およそ経済発展を促すようなものであってはならない、むしろそれを抑制・制御する立場の原理に切換えねばならないだろう。

しかし、もし万一、水資源不足の与論形成をはかっている指導集団が、私のいう廃棄物めがねをかけた上で、水資源システムが都市の膨脹に追従せざるを得ないという本音を懐いているとすれば、それは何を意味するか。本来、社会の裏のシステムであるべきものを表に躍り出させ、NHKが総合ニュースで報道し、政治家がそれを叫び、……というパターンこそ、まさに指股の間に見えている水破局を迎えるに当たっての政治の excuse でなくて何であろうか。

★ ★ ★

さて、公共水システムは、世界に名だたるわが経済システムとなじみうるのかどうか。1トンという大量の水がわずか60円である。また逆にわずか1トンの水は河や湖の中では観測誤差のオーダーである。このような状況では、公共料金とか限界費用あるいは費用・便益など、経

経済上の抽象概念をいかにエスカレートさせても、水道経営の累積赤字額が雲散霧消することはない。

毎日都市に運び込まれる生活物質の中で、水は最も量が大きいのに、価格は最も安価なものになってしまった。その理由のうちの重要なひとつが廃棄物めがねをかけて水を見なかったことである。廃棄物めがねをかけて見ると、水は明らかに汚泥である。めがねの度が弱かったゆえに、そして水が量的に豊富であったばかりに、全く歪んだ交換価値行使の定型化が促進され、水でも汚泥でも、循環再利用が定着することはなかった。

私は、やむを得ず、度の非常に強い廃棄物めがねを二重にかけて、「水の交換価値だけを円やドルの共通指標に換算し、このシステムを長年にわたって運営してきた悪弊の蓄積」を問題にせねばならない。

つまり、従来の水の経済的評価方法が誤っていたからこそ、あるべき水循環構造に近づき得なかったネガティブな要因を、既存の尺度で評価するのである。水道の単位供給量当りの赤字額の累積値が正解の裏の値に相当することがわかるであろう。そして新しい方式の最適化は、赤字額のような過去のシステム目標の裏の値をいったん時間で積分してその蓄積量を求め、それをもう一度、変数と変えたシステム境界で微分するのである。

★ ★ ★

貨幣的赤字の次に重要なのが、情報的赤字の集積である。例は実に多い。教育ママが熱心になればなるほど、満たされるママの割合は少なくなり、差額の赤字は集積する。子供の数は一定でも熱心さが加速して対象が幼年化する間は集積が続く。胎教ママの時代に至ると、勇気をもって結婚することもできなくなり、結婚制度も崩壊するかもしれない(?)。

教育ママは、一方では、過保護赤字を集積した青少年を増し、将来の社会を支える活力はゼロに近づく。

上述の種々のパターンに表われている〔潜在廃棄物＝赤字〕の蓄積は、すべて、活動の基準量が急激・大量であった状況の裏側に生じていることがわかる。もし家庭の主婦ですら、急激大量な内助の功を求められてきたものとするれば、主婦の赤字量がいま最大に達しかけているのではないか。新たに高学歴をもって主婦層に参入するはずの女性達はいったいどうすればよいのだろうか。内助の内容ははじめからわかっているのに、多分新たに経験しようとはしないだろう。

これまで社会の発展を支えてきた裏側のシステムに、廃棄物や赤字を集積させないような物質・経済・情報評価構造をつくりあげねばならない。しかしそれをしも、大量・急激に行えば弊害の方が多いだろう。私たちはこのように重要な転換点に立っているのである。